

La Grammaire modulaire

Ronat, M. et D. Couquaux eds. (1986)

Les Éditions de Minuit

三 藤 博

1. 初めに

本書はフランスにおける生成文法研究の現状をよく伝える論文集である。共同編集者の一人 Mitsou Ronat は、Noam Chomsky に彼の文法理論についてのみならず政治についての考え方を問うた対談 *Dialogues avec Mitsou Ronat* (1977, Flammarion) で有名であり、近年は *syntaxe* と *intonation, prosodie* との相関関係についての論考を発表して活躍していたが、1984年7月、自動車事故のため38才の若さで逝去した。いささか時間は経ってしまったているが、本評を始めるにあたって、まず謹んで哀悼の意を表したい。

Introduction (この部分は主として M. Ronat の執筆) の記述によれば、本書収録の諸論文は、もともと L'Association Française des Linguistes Génératifs が主催して1982年5月と1983年1月にフランス国内で開催された二つのコロックの際に読まれたものである。ただし、口頭発表以来かなりの時間が経っており、その間に “profondes modifications” を経た論文も少なくないという。なお、L'Association Française des Linguistes Génératifs という組織は、全ヨーロッパに広がる生成文法研究者の組織 GLOW (Generative Linguists of the Old Worlds) のフランス支部といった性格を持ち、パリ第8大学の Jacqueline Guéron を会長としている、とのことである。フランスにおいてこのような生成文法研究者の組織が存在し、かなり大規模なコロックを主催するだけの力を備えているということは、筆者は本書の Introduction を読んで初めて知ったのであるが、従来フランス国内にあっては、圧倒的に優勢なフランス独自の様々な言語理論 (Martinet 派, Guillaume 派, Pottier 派, Culioli 派等々) を前にして、充分には根づいていないという感の拭えなかった生成文法が、ある程度の広がりをもって着実に発展しつつある証左として歓迎すべきことである。このことは、単に筆者が生成文法に拠っているために言うのではなく、フランス伝統の言語理論にとっても、生成文法からのインパクトを受けて自らも革新していくという積極的な相互作用が期待されるからに他ならない。

本書収録論文の執筆者名と、その論文の内容を列挙すれば次の通りである。ただし、内容の欄には実際に論文が中心的に扱っている題材を挙げたので、論文のタイトルではないことをお断りしておく。

Daniel Couquaux	主語人称代名詞は NP と考えるべきことを示す
Jacqueline Guéron	英語の topicalisation 構文における同一指示について
Hélène Huot	補文内における接続法について
Pierre Jacob	限量子の LF 表示について
Richard S. Kayne	主語倒置構文と connexité
Jean-Claude Milner	同一指示と同一指標付与 (coindiciation)
Hans-Georg Obenauer	“Déplacer α ” とローカルな \bar{A} -束縛
Pierre Pica	“longue distance” の統語関係について

<書 評>

Jean-Yves Pollock

Mitsou Ronat

Maria-Luisa Zubizarreta

en の syntaxe について

phono-syntaxe は“métalinguistique”か

ロマンス語における使役構文について

これを見ると現在フランスで活躍している生成文法研究者の殆どが本書に寄稿していることが分かります。生成文法研究者として我々に親しい名前で見えないのは、長老ともいえるべき Nicolas Ruwet と、Jean-Roger Vergnaud、それに *se* の syntaxe 等をめぐって活発に論文を発表してきた Anne Zribi-Hertz の三人くらいのもではなからうか。冒頭に本書がフランスにおける生成文法研究の現状をよく伝えている、と述べた所以である。また、内容を見ても、生成文法の理論に深く依拠したのから言語現象の指摘に重点を置いたものまで極めて多岐にわたっており、フランスにおける生成文法研究の対象も広がってきていることが分かる。

これらの論文の全てを検討することはできないので、次に第2節において、理論面でも現象面でも特に興味深い論文である J.-Y. Pollock の論文を対象を絞って検討していくこととしたい。

なお、以上で“生成文法”という語を用いてきたし、またフランスにおける組織の明証も“linguistes génératifs”となっているわけであるが、本書に収録されている論文は全て N. Chomsky を中心として発展してきた GB 理論の枠組に立脚している。もとより、生成文法は GB 理論に限られるものではない。むしろ、生成文法発祥の地であるアメリカでは、西海岸を中心に、新興の生成文法理論である GPSG (Generalized Phrase Structure Grammar) や LFG (Lexical Functional Grammar) の方が勢力を得つつある情勢である。しかし、フランスにおいてはこうした理論は未だ一つの勢力にはなっていないようである。Montague Grammar も提唱されてからかなりの年月が経ち、ドイツ・オランダ等では大きな勢力として発展しているにもかかわらず、フランス語で書かれた重要な論文があるということは少なくとも筆者は裏面にして知らない。何故フランスにおいて Montague Grammar が支持を得ないのか、また GPSG や LFG が今後フランスで研究者を獲得していくかどうか、といった問題は、科学社会的な観点から見れば大変興味のある点である。しかし、当面の所は、フランス伝統の文法の陣営からでも、“la grammaire générative”と言われる時には、N. Chomsky の理論が(たとえ漠然とはあれ)意識されている、というのがフランスの現状であろう。従って、本稿においても GB 理論を指して“生成文法”という語を用いてきたわけである。

2. J.-Y. Pollock の論文の検討

J.-Y. Pollock の論文のタイトルは“Sur la syntaxe de *en* le paramètre du sujet nul”である。内容は、まさにこのタイトルが示す通り、先ずフランス語における *en* の syntaxe を統一的に説明し、次いでイタリア語の *ne* との違いを所謂 pro-drop parameter によって説明しようという構想の大きなものである。以下に、彼の議論する所を見ていくこととしたい。

論文の冒頭に J.-Y. Pollock 自身も述べていることであるが、フランス語の *en* に関しては Ruwet (1972), Kayne (1975), Milner (1978), Couquaux (1979, 1981), Belletti et Rizzi (1981), Burzio (1981) 等数多くの論文が既に書かれている。こうした研究により、今日では広く知られるようになった *en* の振舞いについての基本的データを先ず列挙してみよう。例文は全て Pollock の論文にあるものであるが、煩雑を避けるため、原番号は省略する。

- (1) J'ai acheté quatre bibelots l'autre jour.
 - a. Trois sont déjà cassés.

- b. * Trois en sont déjà cassés.
 c. * J'ai déjà cassé trois.
 d. J'en ai déjà cassé trois.
- (2) J'ai acheté une petite statue l'autre jour.
 a. Le bras droit est déjà cassé.
 b. Le bras droit en est déjà cassé.
 c. J'ai déjà cassé le bras droit.
 d. J'en ai déjà cassé le bras droit.
- (3) a. Le premier chapitre du livre est surprenant.
 b. Le premier chapitre du livre a surpris Marie.
 c. La nouvelle formulation de la loi paraîtra demain.
 d. La nouvelle formulation de la loi révoltera beaucoup de gens.
- (4) a. Le premier chapitre en est surprenant.
 b. * Le premier chapitre en a surpris Marie.
 c. La nouvelle formulation en paraîtra demain.
 d. * La nouvelle formulation en révoltera beaucoup de gens.

先ず、(1)と(2)の対比を説明するために、Pollock は Milner (1978) 等に従って、(1)、(2)の文の主語 NP の内部構造を次のように考える。さらに、Williams (1982) によって導入され、GB 理論で普通に用いられている index の head への percolation という機構をこれに組み合わせて、次のような S-構造の表示を得ることとなる。

- (5) a. [_{NP_i} trois PRO_i] sont déjà cassés e_i
 b. * [_{NP_i} trois PRO_i] en_i sont déjà cassés e_i
 c. * j'ai déjà cassé [_{NP_i} trois PRO_i]
 d. j'en_i ai déjà cassé [_{NP_i} trois PRO_i]
- (6) a. [_{NP_i} le [_{N_i} bras droit] PRO_j] est déjà cassé e_i
 b. [_{NP_i} le [_{N_i} bras droit] PRO_j] en_j est déjà cassé e_i
 c. j'ai déjà cassé [_{NP_i} le [_{N_i} bras droit] PRO_j]
 d. j'en_j ai déjà cassé [_{NP_i} le [_{N_i} bras droit] PRO_j]

上の構造表示に示されているように、PRO は(1)=(5)では NP の head であるが、(2)=(6)では head ではない。この対比が文法性の対比となって現れてくることになる。index の percolation は projection を示し NP 全体にかかる統率 (government) 等の関係が head にまで及ぶことを示す機構に他ならない。これを用いて、Pollock は問題の対比を次のように説明する。

(5c)がよくないのに(6c)がよいのは、(6c)では PRO が projection のラインから外れているため動詞 *casser* からの NP への統率が PRO に及ばず、PRO は統率されてはならない、という束縛 (binding) 原則上の定理に適合しているのに対して、(5c)では PRO が動詞 *casser* に (適正) 統率されてしまうためにこの定理に違反しているためである。a のペアに関しては、Pollock は (5a) は主語の位置であるので head

の PRO が現れてよいとし、従って b のペアに見られる対比は、PRO の方ではなく *en* の方の適正条件によって説明しようとする。つまり、ここに従来の研究からの発想の転換が見られるわけである。Pollock は *en* を prominal 形と見なすことにより、*en* には束縛原則の (b) (prominal 形は統率範疇内で自由でなければならぬ) が適用されるものとする。すると直ちに、与えられた index の関係によって、(5b) では *en* が主語 NP により束縛されているのに対して、(6b) では *en* と同一指標を持つ PRO は *en* を束縛していない (主語 NP 内部の枝分かれ構造により PRO からの c-command が阻止されるためである) ことが分かり、データの対比が説明される。(3)に *en* の cliticisation を行ってえられる(4)に現れてくる文法性の差については、Pollock は形式的な分析は特に示していないが、Couquaux (1979)や関係文法の知見を GB 理論に持ち込んだ Burzio (1981) 等で提唱された、*être* の構文や、いわゆる反対格動詞の構文において S—構造での主語は D—構造では動詞の右にあったものとする分析をそのまま継承し、これに Couquaux (1979) 等では clitic-placement rule の適用可能性として扱われていた点を Chomsky(1982)での提唱に従って *en* cliticisation は動詞の θ —ロール領域 (ほぼ Williams のいう internal argument に相当する) からに限られる、とする制約を設けることにより説明される、としている。すなわち、*en* cliticisation の不可能な (4b)、(4d) では主語 NP は動詞の external argument になっているのに対して、(4a)や(4c)では動詞から θ —ロールを付与される位置にある、というわけである。もちろん、(4)に関するこの説明は Pollock 独自のものでなく、従来の分析を総合したものに他ならない。

以上に見た Pollock の分析は、これまでに提示されてきた分析を踏まえつつ、*en* quantitatif ((1)の例)と *en* génitif ((2), (4)の例)を統一的に扱おうとしている点で極めて注目に値するものであるが GB 理論の分析として厳密に見ると、残念ながらこのままの形では維持できないものと言わざるを得ない。以下にその理由を述べよう。

先ず、Pollock は (5c)において head である PRO が統率されているために非文となっていると述べているが、それならば全く同じ理由により (5d)も非文になってしまうはずである。もちろんこの位のことを Pollock が見逃すはずもなく、彼は (1d)の構造として (5d)以外に、PRO を *e* (anaphor) とする構造も考えられるが、いずれかを決定することは本論では行わない、と書いている。さらに、註において PRO でも *e* でもなく *pro* である可能性も示唆している。ところが、これを *e* としても *pro* としても不備が生じることは容易に見てとられるのである。以下にこのことを示す。

第一に、*e* と考えてみよう。この場合には、*en* を先行詞とする照応形と見なすわけである。この時は、*e* は逆に適正統率されなければならない要素となり、動詞からの適正統率を受けている (1d)は確かに問題ないことになる。ところがこの分析を一貫させるならば、同じように *en* の現れている (1b) = (5b)、(2b) = (6b)、(2d) = (6d)についても PRO の箇所を *e* とする必要があるだろう。(1b)の場合は、*e* として問題はない。主語の位置で適正統率されず ECP に違反しているのでアウトであり、さらに Pollock の分析によれば *en* の方にも束縛原則 (b)の違反があるので、いずれにしても全体として非文という判断と一致する。ところが、問題となるのは (6b)と (6d)である。これらはいずれも文法的なのであるが、*e* を置く分析を取ると、まず ECP に違反しないようにしなければならない。(6b)や(6d)の位置で *e* を適正統率させようとすれば、NP 内で head N による適正統率を考える他に手段はない。ところが、もし (6b)、(6d)の位置で *e* が head N によって適正統率されているとするなら、これらと全く同一の構造にある (6a)、(6c)において head N が PRO を適正統率していることになり、上述の PRO に関する定理に違反する。この時、(6a)、(6c)の PRO を *pro* に置き換えれば、この点は何とか免れ得るが、すぐ下に述べる通り、一般に *pro* としてよいわけではないことが一つと、より本質的には次のような議論立てによって (6a)、(6c)に *pro* を置く解決策も全く否定し去られてしまう。すなわち、(6b)と(6d)において *e* が可能となるためには、ECP の問題を別にしても、この照応形が束縛原理(a)を満たさなければならない。ところが、(6b)においては、*en* を先行詞としてとることはできない (*en* のある位置から *e* の位置を c-command することはできない)ので、残る唯一の解決策は、Aoun (1985)の機構をここに援用して、主語 NP 内の specifier である *le* が

e と同一指標をとり、かつ *le* が統率範疇の定義に言う accessible SUBJECT となることにより、*e* に対する統率範疇は主語 NP であり、*e* はこの中で *le* によって正しく束縛されているので OK、というように議論を進めることである。ところが、こう考えると、これと全く同一の NP 内部構造を持つ (6a) にも同じ議論があてはまらざるを得ない。しかるに、*pro* は pure pronominal であるから主語 NP 内部で束縛されてはいけないのである。つまり、(6a) と (6b) が *pro* と *e* で、しかもどちらも文法的である、ということはある得ず、どちらか一方を OK とすれば他方はかならずアウトとなるわけである。ところが、実際の判断は両方とも OK なのであるから、結論としては、(6a) を *pro* として ECP 違反を救うことによって、(6b) を *e* としようという分析は成立しないことが示されたことになる。もちろん、同じ *en* が現れていても (5b) や (5d) は *e* であり、(6b) や (6d) は PRO である、と主張することも不可能ではあるまい。しかしながら、そのような主張は単に判断に合わせて構造を恣意的に変えているだけであり、どう見ても説明とは呼び得ないことは誰の目にも明らかであろう。長くなったが、以上で (1d) = (5d) の PRO を *e* で置き換える分析が成立しないことを示した。

そこで次に、*pro* と考えてみよう。この時、*pro* は head なのであるから、この *pro* に対する統率範疇は S 全体である。ところが、その S の内部に同一指標を持つ要素 *en* があるので、*pro* はこの *en* に束縛されていることになる。ところが、*pro* は pure pronominal 要素であるから、このことは上述の束縛原則 (b) に明らかに違反している。以上の議論から、(1d) = (5d) の PRO の箇所は、PRO のままではいけないのはもちろん、*e* でも *pro* でもいけないことが明らかになったことと思う。つまり、Pollock の挙げた可能性が否定されたのである。このことは、そもそも (5d)、ひいては (5) 全体のような NP 内部構造を想定すること自体に大きな無理があることを示唆しているものである。

Pollock の分析で第二に問題となるのは、彼が一般に主語の位置を統率されていない位置と見なしていることである。彼が (5a) のような構造を立てているのもこのためである。しかし、言うまでもなく、通常の GB 理論では主語の位置は有時間制文では AGR によって統率されているものと考えている。従って、(5a) はこのままでは受け入れられない。もちろん、一般に有時間制文でも主語の位置が統率されないような理論を構築することは一向に構わない。ただ、(5a) を生かすためだけに、広く受け入れられている点に、特に何の論証もなく恣意的な変更を加えることは慎むべきであろう。

以上に見てきたように、Pollock の分析は、GB 理論の下位理論を駆使して *en* の syntaxe を解明しようとしている点で非常に重要な寄与であることは疑いを容れない。ただ、細部には大きな問題が残されており、今後の研究のために極めて優れた見取り図を提供したものと評価するべきであろう。

3. 終わりに

本稿では、具体的分析については J.-Y. Pollock の論文を検討しただけに終わってしまったが、本書収録の他の論文にも極めて興味深いものが多い。しかし、GB 理論からするフランス語の分析は未だその緒についたばかりであり、どの論文も問題の隅々にまで最終的な解決を示すというよりも、説明のつく所から順にまとめていこうという精神で執筆されているようである。このことは、GB 理論、或いは広く生成文法の研究者がフランス語の分析に関して今後為すべきことは非常に多いということに他ならない。筆者もその末に連なる一人として、大いに刺激を受けることのできた一冊であった。

Bibliographie

Aoun, J. (1985). *A. Grammar of Anaphora*. MIT Press.

<書 評>

- Belletti, A. et L. Rizzi (1981). The Syntax of *ne* : Some theoretical implications. *The Linguistic Review* 1-2.
- Burzio, L. (1981). *Intransitive Verbs and Italian Auxiliaries*. Doctoral dissertation, MIT.
- Chomsky, N. (1981). *Lectures on Government and Binding*. Foris Publications.
- Chomsky, N. (1982). *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding*. MIT Press.
- Chomsky, N. et M. Ronat (1977). *Dialogues avec Mitsou Ronat*. Flammarion.
- Couquaux, D. (1979). <Sur la syntaxe des phrases prédicatives en français>, *Linguisticae Investigationes*, 3-2.
- Couquaux, D. (1981). <French Predication and Linguistic Theory> in May, R. et J. Koster (eds) (1981).
- Kayne, R. (1975). *French Syntax*. MIT Press.
- May, R. et J. Koster (eds) (1981). *Levels of Syntactic Representation*. Foris Publications.
- Milner, J.-C. (1978). *De la syntaxe à l'interprétation*. Seuil.
- Ruwet, N. (1972). *Théorie syntaxique et syntaxe du français*. Seuil.

(大阪外国語大学助手)